

2016年5月29日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 使徒言行録2章43節～47節

02:43 すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。02:44 信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、02:45 財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。02:46 そして、毎日ひたすら心をつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、02:47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

説教「すべての人に畏れが生じた」

◆只今司会者によって朗読されました聖書の箇所、使徒言行録2章43節～47節は、短い箇所ではありますが、初代教会の様子が実によく描かれていると思います。この箇所は毎年、聖霊降臨節の時期に読むのが恒例になっています、私たちには親しみのある箇所があります。しかし今回わたしはここを読んでおまして、この箇所が芳しい香りを放っているのを覚えました。なんと慕わしい素晴らしいことが記されているのかと思いました。

◆以前にも話したことがあります、聖書を読んで分からない箇所があれば、聖書の他の箇所を読んでみる。そうすると、分らなかった箇所が分るようになる。そういう経験を皆さんもされていると思います。聖書はこれだけ大部の書物です。実に多様な事が書かれております。何度読んでもよく分らない箇所もあります。そのような時、今日の箇所を想起するのがよいと思います。

◆古来「グレート・テキスト」と呼ばれる聖書の箇所があります。偉大な箇所という意味で、“これが聖書が伝える事の核心”と言える聖書の箇所の事です。例えばルターが「小福音」と呼んだヨハネ伝3章16節がそうです。バルトが「聖書の光源」と呼んだコリント前書15章「復活の章」がそうです。詩編第23篇や詩編中最も短い117篇なども「グレート・テキスト」です。私の愛唱聖句ロマ書8章31節～39節も「グレート・テキスト」です。今日の箇所には教会の原像が描かれています。今日の箇所は正に「グレート・テキスト」です。信仰に生きるとはどういうことか。信じるとはどういうことか。教会生活は如何にあるべきか。伝道は如何になされるべきか。平和を造り出すにはどうすればよいか等々、私たちが繰り返し立ち返り、聞くべき「グレート・テキスト」です。

◆43節にこうあります。「すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていた」と。ここに「すべての人に恐れが生じた」とありますが、この「恐れ」はこの字ではなく、畏敬の「畏」を当てるべきだと繰り返し申してきました。この「畏れ」は神様に対する畏れです。私達が人生において経験するありとあらゆる恐れを克服させてくれるところの「畏れ」、それが神様への畏れです。一切の恐れ、恐怖から私たちを解放してくれるところの畏れ、それが神様に対する感謝を伴った畏れです。しかもこれも繰り返しになりますが、「すべての人に」は誤訳ではありませんが、「魂」とか「靈魂」と訳されるべき言葉で、口語訳では、「みんなの者におそのの念が生じ、多くの奇跡としるしとが、使徒たちによって次々に行われた」となっていますが、この方が良いです。

◆「次々に」というのも意識です。「畏れが生じました。そしてその畏れはずっと続きました」という表現です。そしてまた使徒たちが奇跡を、イエス様が生前なされた数々の不思議の業、癒しの業、しるしと奇跡が、使徒たちを通して行われ、これも途絶えなかったという表現です。畏れの持続と奇跡の持続。口語訳では「多くの奇跡としるしとが使徒たちによって次々に行われた」となっています。今日の箇所は短い箇所ですが、ここに出てくる動詞はすべて、そういう持続を表現しています。「神様への畏れが生じ、それが持続し、使徒達による奇跡としるしも絶えませんでした。」今日の箇所のすべての動詞がそういう表現なのです。教会とはそういうものだということです。一時の感激とか感動、勿論それがなければ、私たちは信仰に入ることにはないのですが、時に「昔の感激を忘れて」と言ったりしますが、それは、根源的な大事な事柄、畏れの喪失を表しています。

◆しかし、最初の教会はそうではなかった。本当に神様を畏れました。そしてそれはずっと続いたのです。その「畏れ」というのは、47 節を見ますとこうあります。「喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していた」と。この「畏れ」は神様を賛美することと一つである所の畏れです。感謝に満ちた畏れですね。その中に生きるのが信者であって、その群れが教会なのだということをこの箇所は語っています。先程、「全ての魂に畏れが生じた」と訳すべきだと申しましたが、この「魂」とか「靈魂」と訳されるべき言葉は、実は「呼吸する」という動詞の派生語です。ですからこれは教会の日常の息づかいなのです。私がいつも使っていますギリシャ語の辞典はこういう説明を加えています。(神の助けにより永遠の命を生きることができる人間のいのちの最も尊いものとしての)「魂」。(体は死んでも失せない)「靈魂」。そういう命を賜る神に対する「畏れと賛美・感謝」が生じ、それが持続したのです。それが43 節で語られていることです。

◆43 節の後半に「使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていた」とあります。これは生前の主イエス様がなされた奇跡と不思議な業が弟子たちを通して行われたということですが、今日の箇所の最後の47 節にこうあります。「信者たちはみな一つになって、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」と。「弟子たちを一つになさっているのは、主イエス・キリストです」と言っているのです。生前、主ご自身がなされた御業を、今、弟子たちと共にいて、弟子たちの中に「霊」として「魂」として生きて働いておられる霊なるイエス様が、今もその御業をなさっておられるということです。そうこの聖書は語っているのです。ですからこのイエス様を主と信じる私たち一人一人の中に主イエス・キリストは、正に聖霊として生きて働いて、御自身の命を私たちの中で生きておられるのです。

◆あのボンヘッファーは、「キリストは教会として現臨しておられます」と表現しました。これは神学の言葉であると同時に、正にイエス様は教会として、私たちと共にいて、私たちの中に現臨して働いておられるという事を言っているのです。彼は39 歳の若さで1945 年にヒットラーが自殺する直前に処刑されますが、長く死刑囚の最後を看取ってきた医師が証言しています。「ボンヘッファーは獄中であってまるで王様のようにであった。このように獄中生活を、そして最後を迎えた人を私は知りません」と。神様に対する畏れと賛美と感謝、それは獄であろうが、どこであろうが、主は我が内に生きておられる。私とイエス

様とは一体なのだ。ですから、主イエスの御心は、今も私において果たされているという信仰と確信ですね。ですから神様を畏れ、主イエス様を信じる者には、この世のいかなる逆境も苦悩もあらゆる試練もそれは相対的なものであり、主を信じる者の魂を不自由することは絶対にできないのです。そういう生活をこの最初の弟子たちはしたのです。それがここに書かれていることです。そしてこれがわたしたちにも賜っている恵みなのです。

◆今年の「聖霊降臨節」以来、「聖霊降臨とは神の全存在の施与、神の全賜物も施与」と繰り返し申し出てきました。神様はその全存在と全賜物を私たちに施し与えて下さるのです。私たちにどうしても必要な物ならば必ず与えて下さいます。御子をさえ惜しまず賜った神様が、その他私たちの必要を与えて下さらないはずはありません。聖霊降臨とはこのような「神の全存在と全賜物の施与」の出来事なのです。この神様の限りない恵みは、私たちが認識する前から、永遠の始めからそうなのです。しかし私たちの目がふさがれていて、この事実が見えなかったのです。この事実の認識は「啓示」による開眼以外にありません。

◆昨日も今日も明日も、永久に常にそうである神様の恵みの事実に見えぬことは、「神様の自己啓示」による以外にありません。そしてこの啓示における神様が、聖霊なる神様なのです。そしてこの恵みの事実は、絶えることはありません。今日も礼拝の最初に読まれた詩篇第117篇は詩篇中で一番短い詩篇です。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまこととはとこしえに私たちを超えて力強い。ハレルヤ。」これを私は先日の聖書を読む会で、「主の慈しみと真実とは、わたしたちの上に漲り溢れ、絶えることがない」と訳しました。これは詩編作者の賛美と感謝の歌です。この神様は常に私達と共にいまして、私達を助けて下さいます。

◆それで次のところを読みたいと思います。「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、(というのは心と体と魂に関わる一切のものを、その喜びも悲しみにも共に与る。これが「共有する」ということです。これが「交わり」です。)持ち物や財産を売り、おのおのの必要に応じて皆がそれを分け合った」のです。これは普通したくてもできないことです。財産や持ち物を売り払い、ここに書かれているのは、しびしびとか、義務感でというのではなく、生ける主の御愛に促されて、持ち物や財産を売り払い、皆が必要に応じてそれに与ったのです。そして毎日ひたすら心をつにして神殿に参り、家ごとに集ってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので「民衆全体」から好意を寄せられたのです。

◆ペトロの説教を聞いてその日に仲間に加わった人が三千人いたと、今日の直前に書かれています。他にもペトロの説教に感動し、そして信者たちの生活に注目する人々は沢山いましたけれども、この仲間に加わることに躊躇した人も多くいた事でしょう。キリスト教は、その当時生れたての「異端」です。そのような仲間に加わる事は単なる勇気ではできません。しかし民衆は、彼らの神を讚美しているその生活ぶりを見て、好意を寄せたのです。この「好意」という字は普通、神の「恵み」と訳される言葉です。この新たに生まれた人々、教会の人々は全ての物を売って、必要に応じて分け合ったのですが、それでも不足していたのです。それを見ていた民衆が、施し物をしたというのです。最初の教会は正にキリストの香りを放っていたのです。周りでそれを見ていた人たちは施さな

いでおれない気持ちになったのです。神様は、教会内部の不足を一般の人々の好意によって支え給うたのです。こうして主は救われる人々を日々仲間に加え、一つにされたのです。

◆「今、平和を造り出すために、何をなすべきか」ということが私達の喫緊の、世界中の課題です。このことについては先程触れました詩編 117 篇にこうありました。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ」と。これは神様を畏れ、信じる教会の呼びかけです。この呼びかけが本当にすべての国とすべての民に説得力があるかどうかは、呼びかける者の生活と実存如何に、どう生きているかにかかっています。呼びかける人々が、今日の聖書の個所に記されているように、生きているならば、教会人と一般民衆との境は壊れ、共に恵みに与る事ができるのです。そこに平和があります。このようにして主は救われる人々を日々仲間に加えてくださることでしょう。

◆ここに持ってきましたのは星野富弘さんのカレンダーの絵です。この花は「ハナニラ」というそうです。こういう言葉が書かれています。「この花は この草にしか 咲かない そうだ 私にしか できないことが あるんだ」。今日の聖書を読んでいますと、ここには色んな人がいます。財産を持っている人もいれば、無一物の難民もいる。けれども一人一人が自分にできる事、自分に与えられた賜物を生かして奉仕したのだと思います。誰一人として余計な人はいないし、何もできない人もいません。自分に出来ることをして、人に仕え、神様への感謝を表したのでないでしょうか。わたしたちは一つ体ですから、どの部分が痛んでも全身が痛むのです。これがわたしたちの交わりの実体だと思います。初代教会はそうだったと思います。

◆小さい人は小さい人なりに、豊かな人は豊かな人なりに、神を畏れ、神に感謝しつつ、仕え合ったのです。そういう姿を見ていて惹かれない人はどこの国にもいないと思います。そういう点で私たち一人一人がイエス様にとってなくてはならない存在です。そしてその人にしかできない奉仕があるのです。それらがキリストによって一つにされる時、そこに香り立つ空気が漂うのではないのでしょうか。一切の隔ての壁を超えて、喜びと悲しみを共有する。共に与ることが広がっていくのではないのでしょうか。それが平和だと思います。私にしかできない奉仕があります。それらの奉仕が主イエス様を中心にして一つになる時、広く世界に染み渡って行くのではないのでしょうか。そういう意味において、私たちのこの小さい教会の課題は実に大きいと思います。そして私たちの只中に主イエス様が生きて働かれ、全てを導いて下さるこの事が私たちの教会です。このことを忘れないで、もし忘れていたならば、もう一度今日の聖書に立ち返り、共に歩んでまいりましょう。

◆祈禱

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

わたしたちはあなたの大きいなる変わる事のない恵みと真実にずーっと与ってきました。今またそのことを新たに覚えさせられ、心から感謝いたします。どうか私たち、一人一人の歩みと教会の歩みが、主イエス様によって祝され、本当に、世界のすべての国と人々の平和に資するものとならしめてください。

この祈りイエス様の御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。